

令和2年度第4回県立高等学校みらいのあり方検討委員会 議事録

日時 令和3年2月4日(木)9時30分～12時00分
場所 三重県総合教育センター 第2講義室
出席者 県立高等学校みらいのあり方検討委員会委員(欠席:南委員)
事務局(高校教育課、教育政策課)

【県立高等学校生徒を対象としたアンケート(速報版)】

教育委員会におけるアンケート結果の所見はどのようなものか。

(教育政策課)

例えば質問1(高校入学前に期待していたこと)などにおいて、普通科、職業学科、総合学科など学籍する学科により回答傾向の違いがあることなどを確認することができた。

新学習指導要領で重視されている「探究」の資質・能力を向上するために重要と考える読書に関する質問項目を設けたが、アンケート結果を見ると、「図書室の場所がわからない」といった回答もあるなど、本と自分をつなげ自ら学んでいくことのできる力の育成についての課題が見えてきた。

国が実施している「21世紀出生児縦断調査」では、自分で進路選択をしたかどうかが入学後の満足度に大きく影響しているという調査結果が出ている。自分で調べ、考え、人に相談するといった「選ぶこと」の過程には、「学ぶこと」にあたって重要な要素が盛り込まれている。子どもたちが高校を選ぶ時点、高校卒業後の進路を選ぶ時点においてどのように選んできているのかは今回のアンケートだけでは見えてくるものではないが、今後も引き続き、生徒の現状を浮き上がらせていく努力をしていくことが必要である。

図書室で本を選ぶ際 amazon にあるようなレビューを参照することができないことをもたたりなく感じる子どもたちがいるかもしれない。今の子どもたちにとって学びのツールは本だけでなくことから、本を読むことのみ限定せず動画などデジタルな学びの手段もあわせて提案していかないと、子どもたちは窮屈に感じるかもしれない。

本県における各学科の生徒数は普通科6:専門学科3:総合学科1の割合であるが、アンケート回答者の構成割合は必ずしも現実に合っていないことから、アンケート結果を全体の傾向として見る際には注意が必要である。

インターネットで本を検索するのは異なり、図書室は「こんな本があるんだ」という出会い・発見をする場としての役割もあるので、学校においては、授業での利用に加えて、生徒に図書室の利用を勧めることが大切である。

高校生や大学生と話をすることで、彼らは将来を考えることに億劫になっているのではと感じることがある。子どもたちが自らのキャリアを考えることに億劫になっている原因

は何かを考える必要があるとともに、キャリア選択にあたって、授業では学べない情報を図書室で手に入れることができると生徒が考えられるようにしていればより能動的な図書室利用を促進できるのではないか。

「なぜ本を読まないのか」という質問に対して「時間的な余裕がない」「興味がない」という回答が多いが、そう答えた子どもたちの気持ちはよくわかる。平日は授業、休日も勉強、部活で忙しい状況では本を読む時間もないだろう。子どもたちに図書室を活用し本に親しんでもらうためには、例えば、授業の中で図書室での自由時間を設けるなど、子どもたちの時間を作ってあげる工夫が必要ではないか。

学びは本や文字からだけでなく、映像や絵、様々な体験・経験を通して行うことができる。本を読んだり、座学を通じて学ぶことが苦手な子どももいる。本を読まないからダメ、図書室に行かないからダメということではなく、一人ひとりが興味・関心を持てる媒体で学べるようにしていくべきではないか。

その子にふさわしい学び方、すなわち個別最適な学びをいかに提供できるかが大切である。個別最適な学びとはICTなどの技術の活用方法を学ぶことではない。自分で学び、考え、意思決定をしていくことのできる力を身に付けるには一人ひとりにあったコースがあり、どのコースをたどってもいいので、最終的には自立した学習者として、自分自身で人生を切り拓いていけるようにすることが大切である。学校においては、あるひとつの学び方モデル以外を否定することなく、子ども一人ひとりを主語にしながらカリキュラムを柔軟にしつつ、そこに軸を通していくことが求められる。

図書室は本を読む場所というだけでなく、教室とは別の居場所としての役割も含めて図書室のあり方について考えていく必要があるのではないか。

中学生が進路を選択する際に与えられる情報は多いに越したことはなく、情報が多いほど不本意入学を避けることにつながる。高校の情報提供の機会を拡げていけるよう考えていくべきである。

子どもたちに時間的なゆとりがないと、読書や様々な経験を通した多様な学びを行う機会は生まれにくい。子どもたちが自由な裁量で動ける時間を作っていくことが必要ではないか。

総合学科は生徒が授業を選ぶことができ、多様な学びを実現していく仕組みとして理想的だというイメージであったが、アンケート結果を見ると他の学科と比べて総合学科の生徒の満足度は低い状況となっている。また、地域や社会をよくするために何をすべきか考えているという問に対して「ほとんど何も考えていない」と回答した生徒の割合が他の学科と比べて高い状況である。

(教育政策課)

本日の資料は速報版であるが、今後、学科毎の回答傾向の分析などアンケート結果の掘り下げがもう少し必要だと考えている。

多様性を認めていこうという風潮に社会がなってきた中で、子どもたちにとって理不尽と思える校則が未だ残っていて、それに対して不満を抱いていることがわかる。ひとつ気に入らないこと、引っかかることがあると、そのことばかり考えてしまって他のことが考えられなくなる傾向にある子どもも多く、ひとつのことに捉われてやりたいこともやれなくなるのはもったいない。抜本的に校則を見直すことが必要ではないか。

アンケートでは、スマホやタブレットを活用した授業を望む声が多い一方で、生徒同士の交流を求める声も多い。新型コロナ禍という状況下もあるが、グループ学習などみんなで一緒に学ぶ機会を増やすことも必要である。

アンケート結果を見ると、総合学科の生徒の意欲が低いように感じる。三重県の総合学科はだんだんと小規模化が進むとともに入学してくる生徒の状況等が変わってきている現状があるのではないか。

(教育政策課)

ご指摘のとおり、本県の総合学科はいなべ総合学園高校を除いて小規模化が進んでいる。近くにその学校しかないような地域の子どものために、複数の系列を設定している総合学科は多様な学びのニーズに対応できるというメリットがある。いなべ総合学園高校にあっては、生徒数や教員数、学校設備も一定の規模で維持できている一方で、小規模化が進む総合学科にあっては、教員の配置数等にも限界がある中で総合学科の特色であるアラカルト型の学びが提供し難くなりつつある状況となっているなど、本県の総合学科は2極化が進んでいる。

今後アンケート結果を詳細に見ていく際は、同じ学科でも良い結果が出ているところと出ていないところ、何が生徒の意欲に影響しているのかという部分について、回答した生徒が通う高校の状況や特色等と関連づけた分析を行ってほしい。

I C T化が進む中で、今後A Iを活用してYOUTUBEのリコメンド機能のように生徒一人ひとりにあった学びの提案をしていくことも考えられる。

アンケートの分析にあたって、普通科の中でも、進学する生徒が多い高校、就職する生徒が多い高校を分けて分析すると見えてくるものもあるのではないか。なお、校則については、全ての高校において今年度中の見直しを進めているところである。

入学時に自らが学びたいと考えていた分野が入学後にも変わることもある。生徒により柔軟な学びを提供し、進路を選択できるよう、周りの大人も柔軟な考え方を持つべきではないか。

アンケート結果を見ると、英語を学ぶことへの関心が高いことがわかる。今後は、ネイティブではない英語に対応する力が求められることから、友人関係や授業の中でネイティブではない地域の人と接する機会を活用しながら学んでいくことが必要となる。

【これからの学びに対応した学科・課程のあり方】

先般の中教審答申においては、各高校の存在意義や社会において期待される役割などめざすべき学校像を明確化する形でスクール・ミッションを再定義すること、また、このスクール・ミッションに基づいて入学から卒業までの教育活動の指針となるスクール・ポリシーを策定することとしている。今後、現場と教育委員会において議論しながらこれらの整理を進めることになると思うが、この「**みらいのあり方検討委員会**」においても、今後、全国的にこういった流れになってくるということを理解しておく必要がある。また、配付資料には、全国の特色ある学科や課程の事例が記載されているが、各校それぞれの状況があってこのような形になっている。そうした結果の形のみを見て三重県もここを目指していこうと考えるのではなく、三重県の現状をしっかりと見た上でどのような高校教育をやっていくかという議論を行っていく必要がある。なお、中教審が示した普通科改革に係る「**特色・魅力ある学科**」はあくまで例示であることも理解しておくべきである。

新たな学科や学校をつくっていくにあたって具体的な形を考える際には、その高校でどんな生徒を育てたいのかといったことが中学生・高校生の保護者や地域の方々に理解されるとともに、それが学校の特色として生きていけるようにすることが必要である。そのためには、情熱を持った教員たちを中心に、地域の方々、できれば中学生も入れて、自分たちが行きたい高校というものについて議論していけるようにしていくべきである。そうした過程を経ないと、結局は魂の部分が継承されていかないこととなり、いずれ上手くいかなくなる。

学校のあり方を具体的に議論し、形作っていく上では教職員の人事異動の年限もそれに適したものにしていける必要がある。

今後すべての高校において重要となってくるのは、その学校でどのような学び方や授業を提供できるのか、また、学校社会にどのような文化を根付かせるかといったことを考えていくことである。生徒アンケート結果からは、生徒たちがどのようなことに満足感や喜びを感じているのかを伺うことができるが、こうした学校の良いところを取り入れながら、その学校のこれからのあり方を考えていく必要がある。

総合学科は個別最適な学びを実現できる仕組みであると考えますが、現在の小規模化が進んでいる状況を放置したままであると、多くの学校が統廃合される結果となることも想定される。多様な学びを提示できる学校は残していくべきと考えますが、そのためには、総合学科においては生徒規模に対応した配置数以上に教員を配置したり、ICTを活用して他

校の授業を受けることができるようにするなどの対策が必要ではないか。

全国的に少子化、高校の小規模化が進む中で、高校の統廃合は避けられないものと考えられるが、こうした潮流の中であって、子どもたちに多様な学びを提供していくための手法として、例えば、小規模化で使われなくなった教室を地元の企業等に安く貸し出すとともに、その企業は授業に関わってもらおうといった地域複合型の学校運営も考えられる。

少子高齢化は一人の子どもを多くの大人で見ることが出来るということになり、子どもたちの多様な学びという点では逆にチャンスになるのではないか。多くの大人が関わる教育を実施していくためには様々な課題をクリアしていく必要があると思うが、教員においては生徒と共に多くのことを学び、考え、前向きに一つ一つの課題を解決していく姿勢が求められる。こうした姿勢を奨励し評価する人事異動のあり方についても考えていく必要があるのではないか。

熱心な教員が異動していった途端に学校も変わってしまうということがあるので、人事異動がある中で子どもたちにより良い学びを提供するためには、熱意や経験、専門的な知識やスキルを持った教員が異動していても、その後任に同様の教員を配置できるよう人員配置をコーディネートできる人材を教育委員会に配置すること、また、ひとつの高校で蓄積された授業のノウハウや経験を他校と共有するとともにICTを活用して他校の授業を受けることができる仕組みが必要ではないか。

三重県では各校長が中心となって目指す学校像やそれを実現していくための取組などを記載したマネジメントシートを作成しホームページで公開するなど、中学生やその保護者にその学校のことを知ってもらえるよう工夫している。一方で、進学を目指すのか、就職を目指すのかなど将来のイメージを持たないまま高校に入学してくる子どもたちも一定数いることから、高校入学後において様々な経験をし、将来を考え、進路を決めていけるようにしていくことも必要である。また、総合学科については、コースが専門的になりすぎると生徒が集まらないなどの問題もあることから、ある程度幅広く学べるコース設定を考えていく必要がある。

中学生が高校卒業後のことまで考えて高校を選ぶというのはなかなか難しく、むしろ何をすればよいか悩んでいる子どもたちの方が多いのではないか。アンケート結果を見ても、今の高校生活に満足していない生徒も一定数いる中で、普通科においては文系・理系といった区別ではなく、中教審答申にもあるように、様々な特色ある学科等を考えていくことも必要ではないか。

三重県では南北で人口に差があることもあって県立高校は県北部に多いが、自宅に近い地域で学べる環境を維持するという点で、都市部ではないところにも県立高校を残しておくとともに、こうした高校においては地域との連携という部分で特色を出していくという形が良いのではないか。一方で、ある程度の規模がないと望ましい学びを実現していくことができないことをふまえると、普通科等を統合して、学びの多様性がある子どもたちのニーズに

応えていける総合学科を拡充していくのが良いのではないかと。また、新たな学科という視点では、例えば、起業を推進するビジネス創造、SDGsを中心に学ぶことができるSDGs未来型、地方創生コース、外国語学科などが考えられ、こうした新しい学科を設置した学校がオンライン等で他校の生徒にも特色ある授業を開放し、単位修得を認めていくようにしたら良いのではないかと。

自由な学びを求めている子どもが増えているという背景もあり、全国的に見ると、通信制の生徒は増加傾向にある一方で、本県の定時制高校、通信制高校はいずれも定員の充足率が非常に低い状況となっている。地域的に不利な状況にある子どもたちや画一的な学びに対応しにくい子どもたちに教育を届けていくことが県立高校の使命のひとつであるが、今後は、生徒の少ない通信制・定時制を通信制に再編するとともに、通信制と定時制の協力体制を作ることで、課題のある生徒をよりフレキシブルに受け入れることのできるしくみづくりが必要ではないかと。

昼間働いている子どももいる中で、定時制や通信制は子どもたちの様々な状況に対応できるという点で大きな役割を担っている。この点、日本語の習得が不十分な子どもにとっては通信制のみでは学習に無理が生じることが考えられることから、通信制の生徒がわからないところを聞きに行けるサテライト教室として定時制高校等を活用できるような通信制と定時制の連携が必要である。更に、地域のNPO法人等との連携も視野に入れる必要がある。

少子化が進む中で生徒数が維持できないとともに財政的にも厳しくなってくるのが想定される。高校に一定の生徒数を確保するためには、大学受験浪人生が受験勉強として高校の授業を活用できるようにしたり、社会人の学び直しとして授業を活用できるようにするなど柔軟な制度設計が必要ではないかと。現役の高校生にとっても異世代と関わる経験は非常に有益である。

学び方の手法として、座学ではなくワークショップ中心の学びをするという特色を持った高校があっても良い。

多様な学びのニーズに応えていくために総合学科を整備しても、授業の仕方等が普通科のそれに戻ってってしまうということが全国の高校で見られている。そうならないためには、教員自身が学び、また、学校の中で教員同士が語りあって手法や考え方を高めていく必要があるが、現状、教員にはそのようなことができるだけの時間がないことから、働き方改革を実現し、高校改革の実行力を担保していくことが必要である。

新型コロナ禍を契機として、学校とは何か、学校での学びとは何かを皆が問い直している。法律的な制約があり、単独の自治体だけで進めていけない状況もある中で、自治体のアイデア等を国へ提案し、全国へ発信していくと良い。

各学校の専門性を高め特色化を進めるとともに、様々な課題に対応していくためには、一定の専門性や経験を有する教員を恒常的に採用していく必要があるのではないかと。

資料には、学校への最新の技術や設備の導入が各学科の課題として書かれているが、高校での学びに必要なのは、そうした最新のものをいかに導入するかというよりは、基本を身に付け、その基本をベースにしながら技術の進歩に対応・応用していける考え方を学ぶことではないか。

様々な手法やアイデアが出るが学校現場は非常に多忙である。教育を変えていくにあたってのボトルネックは働き方改革である。本当に重要なのは選択と集中をすることであり、「何をやらないか」を決めることだと考える。

専門学科における小規模化の進行は非常に問題である。これからの農業科や工業科にあつては、農業作物や工業製品を作ることだけでなく、農作物・製品が最終消費者の手に渡るまでの流通・販売のプロセスについても学ぶことが必要となる中で、農業・工業・商業の各学科について学科の固有性は担保しながらも、それらを一体的に学べる学校が必要であると考えられる。こうした農・工・商学科の一体化・相互乗り入れの学びの形態は専門学科の小規模化を解決していくための有効なアプローチにもなるのではと考えている。

アンケート結果を見ると、定時制・通信制高校に入学した子どもたちの多くは社会に出たときに必要となる基礎的・基本的な学力が身につくことを期待していることがわかる。様々な背景を持った子どもたちの生活を支えるため、学校においては、福祉的サービスも含めたワンストップでのサービスを提供していく役割も求められる。今後、スクールソーシャルワーカーの配置拡充などに取り組んでいくことが必要である。